

# 動物実験代替法の現状と展望

## バイオインダストリー協会がセミナー開催

バイオインダストリー協会は18日、セミナー「未来へのバイオ技術勉強会―動物実験代替法の現状と展望」を開催した。特に産業界での動物実験に関係する環境の変化(欧州での法規制)などがあり、定員を大きく超える参加者が集まった。

今世紀に入り、動物実験をとりまく環境や法体制が変化しつつある。欧州では2013年に全ての毒性項目について動物実験を行った成分を含む化粧品製造・販売が禁止されている。世界的にも、動物実験の3Rs(動物実験の削減、実験動物の苦痛の軽減、動物実験の置換)が重視され、動物実験代替法の開発やその活用が進められている。国内では、動物実験に代わる様々な試験方法が開発され、一部はOECD(経済協力開発機構)のテストガイドライン(TG)に収載されている。

小島氏は、動物実験に関する国際規約の新設や改訂、動物実験代替法が関連しているOECDの皮膚刺激試験や眼刺激性試験などのTGについて説明。国内では、動物の愛護及び管理に関する法律(動物愛護管

理法)で、実験動物の3Rsの徹底が明記されているが、平成24年改訂では、関係省庁と連携して3Rsの実効性を強化すること、実験動物の福祉の実現に努めることが明記されたと説明した。

また、日本動物実験代替法検証センター(JaCVAM)が代替試験法協力国際会議(ICATM)と連携して代替法の情報を取りまとめており、国内で開発

された試験法をOECDのTGにする等の活動を行っている。現状では、動物を用いない代替法には限界がある。現在開発されている動物を用いない代替法は、皮膚刺激、光毒性、遺伝毒性、眼刺激性試験に限られており、有害性の評価には有用だがリスク評価はできない。単独試験法で安全性を担保できる代替法はなく、iPS細胞などの利用には

まだ時間がかかると話した。今後は、動物を用いない代替法の開発を省庁をこえて対応する必要があると発言した。

花王安全性科学研究所の西條拓氏は、皮膚感受性(アレルギー反応)試験代替法の現状と今後をテーマに語った。同社と資生堂で開発した皮膚感受性試験代替法「hICLAT」について紹介。感受性の予測性が良好で、これはOECDのTGに収載されている。既存の代替法では適用が難しかった難水溶性物質も評価できる、新開発の三次元培養モデルを用いた皮膚感受性試験代替法「EpisensA」にも言及した。また、ジャパン・ティッシ

ユ・エンジニアリングの加藤雅一氏は、皮膚刺激性試験代替法の現状と今後について講演した。

国内の動物実験の現状と問題について小島氏は「日本の動物愛護管理法は、欧米と比較して、動物実験の3Rsという視点から遅れを取っている。国際市場の確保のために日本企業の間は欧米の規制に向けている。一番顕著な例は、13年3月にEUで発効された化粧品開発に動物実験を用いないという規制だ。これにより動物実験代替法の開発が不十分で、安全性を担保できる保証がないにも関わらず、多くの日本企業がこの規制に賛同してしまっ



セミナーの様子

今回のセミナーでは、動物実験代替法の現状と今後の展開について、日本動物実験代替法学会の小島肇会長(国立医薬品食品衛生研究所安全性生物試験研究センター安全性予測評価部安全性予測評価部第二室室長)らが講演した。